

執筆者紹介

鄭毓瑜 Cheng Yuyu

台湾大学中国文学系講座教授。中国古典文論、近現代文学・文化。『文本風景—自我與空間的相互定義』、『引警連類—文学研究的關鍵詞』、『姿與言—詩國革命新論』

王德威 David Der-wei Wang

一九五四年生まれ。ハーバード大学東アジア言語文明学科・比較文学科 Edward C. Henderson 講座教授。現代文学。『The Lyrical in Epic Time: Modern Chinese Intellectuals and Artist through the 1949 Crisis; The Monster That is History: History, Violence, and Fictional Writing in Twentieth-Century China; Fin-de-siècle Splendor: Repraised Modernities in Late Imperial China (邦訳「抑圧されたモダンニティ 清末小説新論」)』

林少陽 Lin Shaoyang

一九六三年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。一九世紀初頭以来の日本と中国の思想史・文学史。『「修辭」という思想 章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』、『「文」と日本学術思想—漢字圏・1700-1900』、『鼎革—文—清季革命與章太炎「復古」的新文化運動』

伊藤徳也 Ito Noriya

一九六二年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授。日中比較現代文化史。『生活の芸術』と周作人—中国のデカダンス—モダンニティ』、『周作人と日中文化史』(編著)、『談話「生活的藝術」的思想基礎』

石井剛 Ishii Taroishi

東京大学大学院総合文化研究科教授。中国哲学。『大乘起信論』と主体性—近代東アジア哲学の形成そして論争』(編)、『齊物的哲学—章太炎与中国現代思想的東亜経験』、『戴震と中国近代哲学—漢学から哲学へ』

橋本 悟 Hashimoto Saoru

メリーランド大学東アジア言語文化学科学科助理教授。中国文学・美学、比較文学・美学。『中国文学にとって世界とは何か?—魯迅「出関」と〈文〉の普遍性』、『跨族寓言—金史良、龍瑛宗殖民後期創作與魯迅作品的互文性探索』、『普遍性・特殊性・範例性—梁啓超による「佳人之奇遇」の翻訳とその中断』

津守 陽 Tsumori Aki

一九七六年生まれ。神戸市外国語大学外国語学部准教授。中国近現代文学。『傍観者』の詩論—沈從文の評論から新文学の「詩化」／散

文化』を考える。『沈從文のフェティシズム—髪のエクリチュールと身体化される「都市／郷土」』、『「におい」の追跡者から「音楽」の信者へ—沈從文『七色塵』集の彷徨と葛藤』

潘少瑜 Pan Shau-yu

台湾大学中国文学系副教授。清末民初翻訳小説、近現代文学と文化。『維多利亞「紅樓夢」—晚清翻訳小説『紅淚影』の文学系譜與文化訳写』、『感傷的力量—林覚民〈與妻訣別書〉の正典化歷程與社会文化意義』、『世紀末的憂鬱—科幻小说「世界末日記」的翻訳旅程』

張政傑 Chang Cheng-dien

一九八二年生まれ。名古屋大学大学院人文科学研究科博士候補研究員。日本文化学。『1968年の可能性—村上龍『69 (sixty nine)』におけるロックとフェスティバル』、『日本 [1968] をめぐる思考—忘却と想起の闘争』、『桐山襲とその「戦後」—冷戦・身体・記憶』

高嘉謙 Ko Chia-dan

一九七五年生まれ。台湾大学中国文学系副教授。中国近現代文学、馬華文学、漢詩。『遺民、疆界與現代性—漢詩的南方離散與抒情 (1985-1945)』、『国族與歴史的隱喻—近現代武侯俠奇的精神史考察 (1895-1949)』、『Song History in Kowloon and Loyalist Classical Poetry: Chen

Borao, Sung Wong Toi, and Autumn Chants on the Terrace of the Song Emperors

裴亮 Pei Liang

一九八二年生まれ。武漢大学文学院副教授。中国現代文学、中日比較文学。『中国五・四時期嶺南文学の新天地——文学研究会広州分会及び詩人草野心平を中心に』『文学団体の創出と嶺南現代文学の成立——文学研究会広州分会の文学史諸相』『響き合う詩心——留学期草野心平の詩風と文学研究会詩人徐玉諾』

鳥谷まゆみ Toriya Mayumi

北九州市立大学外国語学部准教授。中国現代文学。「透明之文與紙上之声——周作人與四方太写生文觀比較論」「越境的小品文——以中小品文的互動為中心」「方紀生のこと——周作人先生のこと」編集と日中文化交流に捧げたその生涯（共著）

松谷暉介 Masutani Yosuke

一九八〇年生まれ。日本キリスト教団筑紫教区牧師、西南学院大学非常勤講師。中国キリスト教史、日中キリスト教関係史。『はじめの中国キリスト教史』（共著）王艾明「王道——二世紀中国の教会と市民社会のための神学」（翻訳）「賀川豊彦と中国——宗教使節問題をめぐる」』

鈴木隆 Suzuki Takashi

一九七三年生まれ。愛知県立大学外国語学部准教授。中国政治。「習近平時代における中国共産党の黨員リクルート政策」「中国共産党の支配と権力」「超大国・中国のゆくえ」3 共産党とガバナンス（共著）

菊池一隆 Kikuchi Kazutaka

一九四九年生まれ。愛知学院大学文学部教授。中国近現代政治経済史。『東アジア歴史教科書問題の構図』『台湾北部タイヤル族から見た近現代史』『日本人反戦兵士と日中戦争』

大平桂一 Odaira Keichi

大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授。中国文学。「夢林玄解」の成立——雲なす証言「平凡社東洋文庫版『世説新語』札記」「平凡社東洋文庫版『世説新語』札記（1）』

林果顯 Lin Guo-sian

国立政治大学台湾史研究所副教授。戦後台湾政治史・宣伝史。「一九五〇年代台湾国際観的塑造——以党政宣傳媒体和外来中文刊物為中心」「中華文化復興運動推行委員會」之研究（1966-1975）——統治正当性的建立與轉變」「欲迎還拒——戦後台湾日本出版品進口管制体系的

建立（1945-1972）』

三好章 Miyoshi Akira

一九五二年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。中国近代史、中華人民共和国教育史。「アジアを見る眼——東亜同文書院の中国研究」（編著）『真宗大谷派淨圓寺所藏藤井靜宣関連資料目録と解説』（監修）『中国21』Vol. 48 特集：いまさら文革、いまなお文革、いまこそ文革（特集担当）

黄英哲 Huang Yin-che

一九五六年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。台湾近現代史、台湾文学、中国現代文学。「去日本化」「再中国化」——戦後台湾文化重建（1945-1947）」「テキストの伝播——台湾における『藤野先生』」「漂泊與越境——兩岸文化人的移動」

翻訳者紹介

石田卓生 Ishida Takuo

一九七三年生まれ。愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員。近現代日中関係史・中国語教育史。日清貿易研究所の教育について「東亜同文書院の中国語文章語教育について」「東亜同文書院の北京移転構想について」

唐 顯芸 Han-yun Tang

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部助教。台湾文学。「論王白淵『荊棘之道』の詩作及其接受―以和『人間文化的出發』の比較を中心」 「戦争と詩、戦争の詩―楊雲萍四〇年代の文学活動を中心に」 「現代詩の可能性を求めて―夏宇／李格弟『このシマウマ』『あのシマウマ』」

張 佳能 Zhang Jianeng

一九九〇年生まれ。神戸大学博士後期課程研究生。中国文化、昭和期の流行歌。

田村 容子 Tamura Yoko

一九七五年生まれ。金城学院大学文学部教授。中国近現代演劇・文学。「ゆれるおっぱい、ふくらむおっぱい―乳房の画像と記憶」 (共著) 「中国文化55のキーワード」 (共編著) 「男旦とモダンガール―歐陽予倩『潘金蓮』の白い胸」

学会通信

◎学会員活動(二〇一八年十一月―二〇一九年三月)
薛 鳴 「人間関係はいかに言語行動に影響するか―中国語社会と日本語社会の比較から」 (『待遇コミュニケーション研究』第一六号、二〇一九年二月、待遇コミュニケーション学会)

松岡正子 「2008 汶川地震後のチャン族の都市への移住と村規民約」 (河合洋尚編『資源化される「歴史」』風響社、二〇一九年三月)、「宗族社会における女性の役割―金門縣珠山聚落を事例として」 (『愛知大学国際問題研究所紀要』第一五三号、二〇一九年三月)

渡津英一郎 「成年年齢引き下げに対応した高校生への消費者教育について―教科に関する教育活動と家庭教育」 (愛知大学「一般教育論集」第五五号、二〇一八年九月)、「民法の成年年齢引き下げに伴う高校教育への影響と対応策―保護者の学校への理解と協力・教育費負担」 (愛知大学「教職研究年報」第八号、二〇一九年三月)

黄 英哲 「敗北者になりたい」―二人の台湾詩人の「一九四九」(塩山正純編『二〇世紀前半の台湾―植民地政策の動態と知識青年のまなざし』あるむ、二〇一九年一月)

中国21 Vol. 51 予告 (19年9月刊行予定)

特集

文献のデジタル化と図書館の未来

―文献の電子化とその後に来るもの(仮題)

学術は世界のデジタル化、電子化にどう向き合うべきか。過去の研究蓄積をどのように引き継ぎつつ、何を可能にすべくどこへ進むべきなのか、本号で考えてゆく。学術の電子化によって得た恩恵は大きい。紙時代の精緻な思想と手順を失ったことも確かであり、電子化自体もデジタル・スラムともいうべき混乱した状況にある。

第一部の座談に続き、第二部では、学術デジタル化の現状を総括する論考を集め、学術の電子化がどのような形で、どこまで進んでいるか、あるいは進もうとしているかを確認する。第三部では、文献大規模電子化の持つ可能性とそれを視野に入れた様々な動き、そして研究手法の変化を含め、過去の研究蓄積をどう引き継いでゆくかを考える。

最後に「デジタル書籍関連ウエブページ案内」を付す。

編集後記——『中国21』編集の仕事はすでにその任を終えていたが、事情により急遽もう一度編集を乞われることとなった。時間がさしせまっていたるなかで、幸いにも国内外の先生方のご協力とご寄稿を得られ、ようやく本特集は完成した。論文執筆、翻訳、座談会出席など、本特集にご参加いただいた先生方に感謝するとともに、なかでもこの特集の構想をご提供くださった鄭毓瑜先生と、労苦を厭わず座談会記録の整理翻訳をしてくださった津守陽先生に謝意を表したい。◇私は台湾出身の一介の留学生の身として来日し、院生時代から今日まで日本の学術界で何とかやってきた。人生の半分以上を日本で過ごしたことになる。日本の恩師のご指導はもとより、日本の友人、同僚、そしていままでの「日本人生」のなかでの良きめぐりに感謝している。(黄英哲)

『中国21』は、愛知大学現代中国学部が一九九七年創立時に中国研究の革新をめざして刊行した学術誌である。一九九七年三月創刊準備号から二〇一九年三月Vol.50まで二二年間、変動する中国を多様なジャンルから読み解いてきた。別冊を含めた53の特集タイトルはまさに一つの現代中国研究史である。企画・編集を愛大現中学生会が担当し、原稿執筆を学内外の気鋭の研究者に依頼、市販するという新しい方法による。予想をはるかに超えるスピードで超大国となった中国は研究対象として極めて手ごわい。さらなる革新をめざして挑戦し続けたい。ご協力いただいた研究者や関係者、読者の皆様から感謝申し上げます。

(松岡正子)

投稿原稿募集 新しい発想から現代中国をめぐる諸問題に切り込む、気鋭の論考を広く募集します。現代中国に関するテーマであればジャンルは問いません。むしろ、既存の学問のジャンルを打ち破るような斬新な発想を期待します。①未発表のものに限る ②論説、研究ノート、報告・ルポ、資料等=50枚程度、書評=20枚程度、エッセイ=10枚程度(400字詰原稿用紙換算) ③ワープロソフトで作成した原稿の打ち出し2部およびデジタルデータを提出。デジタルデータはeメールでの送信も可。

〈原稿送付先〉愛知大学現代中国学会 E-mail: china21@ml.aichi-u.ac.jp

投稿規程の詳細は現代中国学会までお問い合わせ下さい。採否は編集委員会の検討を経て決定し、採用にあたっては規定により薄謝を進呈します。なお、応募された原稿は採否にかかわらず返却いたしません。

中国21編集委員会

〔編集長〕松岡正子 阿部宏志 梅田康子 木島史雄 薛 鳴 三好 章 黄英哲

愛知大学現代中国学部 <http://www.aichi-u.ac.jp/college/chi.html>

中国21 Vol.50

特集 中国近現代の
知識経験と文学

2019年3月25日発行

ISBN 978-4-497-21908-4 C3098

編 集 愛知大学現代中国学会
名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777
Tel. 052-564-6128 Fax. 052-564-6228

発行人 安部 悟

発売元 株式会社 東方書店
東京都千代田区神田神保町1-3 Tel. 03-3294-1001

制作印刷 株式会社 あるむ
名古屋市中区千代田3-1-12 Tel. 052-332-0861